



岐蘇林友第百卅一號

- 一號次
- △研究事項
 - 青年の修養に就て 西澤生
 - 琉球孤島に於ける森林植物に就て 園原咲也
 - △隨筆
 - 時と處とを誤る勿れ 刺紅生
 - 樂地 漢月生
 - 過去帳 淳城生
 - 箱根みやげ 今野啓藏
 - 故山の友へ 多田駒藏
 - △通信
 - 學校通り
 - 寄宿舎通り

(日四十月六年四十四治明) 可認物便郵種三第

日五廿月九年九正大

號一十三百第

日五廿月九年九正大

青年の修養に就て

西澤生

修養とは何ぞや、曰く吾人の人格をして完全ならしむるの謂なり、されば修養は僅か一二年にして可なるものにあらず、實に吾人は自己の生涯を通じて絶へず、勉めざるべからず。後の學校時代の優等生中にも往々卒業後に於て、却つて學校時代の普通なりし者に及ばざるが如き奇現象を呈するは何ぞや、之主として卒業後の修養如何に關するものと言はざるべからず。然らば吾人の人格を完全ならしむるには、吾人は各方面よりして、之を完全することを勉めざるべからざることを勿論なれども、茲に精神的修養として知情意の三方面に就き卑見を述べんに。

一、知的方面より言へば、學問上の知識を増すこと、常識を養ふこと、の二となる凡そ世人は世に立ちて自己の生活を營まんとするに當りては相應の知識を必要とするものなり、若しこの知識なくして業務を行ふは、恰も盲人の道を行くが如く、事毎に活潑ならず、時には意外の變に遭ひて、途方にくる、ことあり、而して此専門的知識は世の進歩に伴ひて絶へず研究すべきものなり、若し吾人此修養を感ずことなくして十年を経過するあらば、蓋し大なる退歩を見ること、なるべし、故に吾人林業界に身を投じたる者は、斯界に對する専門的知識の研究を必要とするものなり。然れども吾人は唯之のみにて決して満足するものにあらず、何となれば世には「かゝることは余の専門以外のことなれば知らず」など言ひて、他を顧みざる如きものなきにしもあらざれども、假ひ専門以外のこと、云へども社會に於ける一般の智力、普通の能力を以て事理を判断するの知識はなかるべからず之れ即ち常識を必要とする所なり、吾人は専門以外に於ても、相應に他の人々と話し得るだけの修養を要す、若し吾人常識を缺かば、爲に不利なること多かるべし、故に吾人は書籍、雜誌、新聞等に於て絶へず専門的知識の修養を圖ると同時に常識の方面をも養ふことに努力せざるべからざるなり。

二、情的方面より言へば、凡そ人間はたゞへ萬卷の書籍を讀みて知識豊富なりとも、情的修養を積まざれば、完全を期すること能はず、此方面より見るも吾人は情的修養に努むるを要す、而して吾人々間は種々の慾望を有するものなり、故に善良なる慾望は之を延ばさんことにつとめ、又抑ゆべきものは、之を抑へざるべからざるなり、凡人は其の從事する事柄によりて、知らず／＼の間に其の性情に變化を及すものなり故に吾人は情的修養の方面に力め、感情を高尙ならしむることに意を用ゐ、境遇のためには惡しき方面に感化せられざる様留意せざるべからず、即ち青年時代にありては無害にして有餘なる道樂を求むること肝要なり、其の細目に至りては種々あるべければ各自の思考を要すべきなり。

三、意的方面より言へば世間には往々一失敗のために元氣全く阻喪し再び立ちて失敗を回復せんと試むる勇氣なきもの少からざるが如し之即ち意的修養の足らざるに起因するものなり。意的修養には忍耐といふこと最も必要なり人間萬事忍耐によらざるべからず、亦忍耐ある者は之れに勇氣伴ふ、人若し一敗地にまみるとも忍耐以て勇氣を鼓舞し之にあたらば前敗を回復する決して難きにあらざるなり、然れども此忍耐勇氣は吾人の體力に關係するは勿論なるが、宗教的、倫理的信念に待つこと偉大なるを以て、此意味に於て吾人は大に體力を練り、宗教的倫理的信念を養ふるの必要を感ずるものなり。

四、結論、要するに青年時代は人生の春であると共に生涯の種子を蒔くべき大切な時である、此時に於て吾人は如何にして種子を蒔くべきか、如何な方面は蒔くべきか吾人の種子を蒔くべき方面は廣い社會にして、何所た蒔くも可なりとするも、一度蒔きて發育不良なりとし、更に地面を撰ばんとする時は、既に遅く、譬へ第二の場所に於て芽を出し、枝を生ずるも蓋し其の花は美しからず、従つて其の實も亦堅くは結ばざるに至る場合尠からず、之れ青年時代は最も大切なものにして、又此時期は再廻せざるにつき、前述の知情意の三方面に對し、絶へず修養に勉めれば後日吾人々格の高尙を期することならんと思ふ。(完)

硫球孤島に於ける森林植物に就て (其九)

17 はちく 淡竹
本竹は實地に迄生ずるものにて我琉球孤島にては單に種子島西之表字中野に一反歩余の一竹林あるを見たるに過ぎず生長佳良にして良材を産せるも虫害にか、れるもの多し

18 黒竹 くらちく
本竹は輸出竹として栽植するものにして舊時は庭園に觀賞用として栽培せられしに過ぎず本孤島にても稀に人家の庭園に一株二株を見るに過ぎず
19 ごまいざ、わかめざ、ふんこざ、
は一種特殊の竹類にして一節より三枚乃至六枚の葉を簇生し莖細く長さ五六尺に達す籜の類を編むに用ゐらる我孤島にては種子島西之表鴨川畔阿曾(奈良朝の頃種子島の島主に昇任されたる道鏡排斥の三鷹の一人大宰の神主仲臣の阿曾鷹の居地とか?)にて採取せしのみなり
20 是よりほうおうちく、めだけ及さ、を述べんとするに當り本孤島に各島特殊の野生竹あり
種子島及七島の かんざんちく
屋久島頂上の やくしまだけ
沖繩本島の りうさうちく
八重山島の きもとだけ
たいみんちくは種子島には栽培せられ

12 七島沖繩本島八重島の一部に野生せり
かんざんちく 種子島の沿岸地方乾燥せる原野に野生する雜竹にして中部には高さ二間周圍二寸位のものを産するも沿岸にては高さ三四尺に過ぎず農業及林業上の有害雜草たりと雖も初夏節を供給し竹材は堀立小屋垣根鶏舎等に利用せらる方言ニガタケ

22 たいみんちく 種子島にては庭園に植へられ節を賞用するも七島にて自生するもの、如し形質かんざんちくに類する高さ四五間徑一寸余に達す八重山島中西長島の浦内川沿岸には班入(圓形輪紋)の種類を産し全小濱島よりは良材を産し物干竿等に用ゐらる
23 りうさうちく 方言 ヤンバルダケ
方言の云へる如く本竹は沖繩本島の北部古生紀粘板岩の地帯に自生し樹木疎らなれば著しく本竹繁殖し今や大部分本竹の占領に委せつ、ありかんざんちくに似て更に小形なるも時に高さ二間周圍一寸五分に達す節は初夏及秋に生じ食するに足り材は建築補助材葉は屋根葺用として用途多きも造林上頗る有害なる竹類なるを以て絶滅を計らざる可からず
種子島にて竹を絶さんと欲せば焼拂ひて蕎麥を蒔く可しと聞けり未だ實驗せず如何のものにや竹を柔くするに蕎麥程にて表る由なるは或は化學的に竹の繁殖を害する作用あらんか

24 おもどだけ (新稱)

こは八重山石垣島の於茂登竹の頂上に産するりり此名あり未だ學名を詳せず御指教を乞ふ性狀やんばる竹なるりうさうちくに似るも節高く莖小にして彈力強く質硬し建築補助材として琉球竹より倍の保存期ありと言ふこの未だ下部に下らず一部の頂上帯を占領するに過ぎず恐らく樹木を伐採し土地を露出せんか山を下るなきを保せず注意す可きなり
25 やくしまだけ 新稱 「サ、オワタライマキノ」
本竹は單に屋久島の頂上帯に産するかんざんちく類に似るも高さ三四尺程は著大を以て大とす千尺位の間に一面大群落をなせり
本竹は何等應用上の價值なきも盆栽として庭園に植む可けんか屋根葺材料とはなる可し屋久島林業經營の時小屋掛に用ゐ得可けんか

26 ほうおうちく 鳳凰竹

本屬の竹類は南方産のものにして一屬三種を産する遠走性の鞭根を持たず一所に叢生簇立する性質を有せりほうおうちくは葉細密着し稍金色を呈する小竹にして庭園木として賞用され本孤島には余り多からず
27 ほうらいちく 蓬萊竹 チンチク (種子島) ニガタケ(沖繩)
是は前者の一變種として記載され居るも

28 たいさんちく トウチンチク(種子島)

本竹も又孟宗竹の如く沖繩により南清より本土に傳へらる、由聞くも未だ本島に其文獻を得ずバンブサ屬中の漸く熱帯性を表せる巨竹にて高さ五六間周圍七八寸に至るは單に庭園木として各地に稀に

存在するに過ぎざるも是又用材として利用されつ、あり節は七、八月頃發生灰汁に煮て用ゆれば頗る美味なり
臺灣産の刺たけ及長枝たけを移植し見るによく繁茂す將來多少繁殖す可きちく類なり



樂地 溪月生

◎夜の空に黒い樹木が其影を響かしてある水蒸氣につ、まれた淡い月の光が、池の水を氣味悪く光らぬ、虫の聲が哀れに細く暗くて見えない地面から聞える、冷たい土の靈のごよめかのかの様に、絶へない、高く低い哀れな音律が妙に心に響いて色々な想を引出して来る、實に秋の夜は此の配置を得て、どれ程深みとなつかしみを覺ゆるだらう

◎吾々は國文で露伴先生の「樂地」と言ふのを讀んだ、これ程感銘した句はない、煩悶の多い青春の頭の中に、或る偉大な光明を放つて、目的に進むべき路次のあかりとなり慰安ともなつて、絶えず新しい努力を努力をど勵まして呉れる、いかな逆境に處しても、どんな難關に打突つても、順課な折でも、人の毀譽褒貶が降らうとも、愉快な氣分で平然と自己の希望に進んで行くこ

とが出来、併し樂地とは己に悪行罵言を續けて平然自得してゐる様な、そんなつまらぬものではないこともつと意義ある正義の樂地である、人々の信仰も修養も皆此の樂地を求めてゐるのではないだらうか
○吾々の一代は山の中だ、多くは人里離れた深山幽谷に生活するのだ、何だか文明の喧囂から遠ざかつてる様な気がする、學校の硝子窓を透した眺めた身にはさう感じる此度の夏は林業視察で、四里も五里も山奥へ行つた時だつた、林業の進歩知らぬのがあの黒川路より數上等の様な、立派な林道が深く高く、何處までも續いてゐた、仲々完備した會所も、人夫小屋もあつた、色々親切を盡して下さつた洋服の人も可成居られた、人夫も大勢ゐて、折柄の豪雨にもめげず威勢良く働いてゐた、併し取巻いた海抜五千何百尺といふ山が鬱鬱として、雲は山頂を厚く包んでゐた、霧は木立をボカし谷を渡り、山を走つた、その霧の下の深い谷の流のさ、やきが、神秘的な音律を響かせて上つて来た、はて此の夜の月は——吹雪の夜はと想像を畫いてゐる身に「おまへの住む所はこゝだ、淋しくはないか」と呼ぶ様だつた、林業の學を修むる自己の心に樂地がなかつたら「あ、淋しい、いやだ」と答へたらう、かゝる地に於ても、心の樂地は溪谷の風景を友として、植山治水の興味を滾々と湧き出させるに違ひない
◎何だか樂地とは、現在の境遇位置に満足

して、行詰つた隠居氣分の様に思はれるがろんな消極的な、向上の氣を失つたものではない
失敗者に對するの慰藉である、獎勵である而して成功者に對するの鞭撻であり、警策である、總ての物を亡ひ、轍阿不遇に泣くときも、行詰つた前途に對しても、心に光明の燈となつて、悲觀するな、進めよ、努めよと勵ましてくれるのだ
◎日本人は或る重大な仕事目的の遂行に當つて、一人で思ひ詰めて一生懸命になる故神經衰弱にかゝる事が多い
平和會議の諸大使の如き、又労働會議、海員會議等に於て我代表者の神經衰弱、皆之を語るものだ、氣永に悠々と構つて事を進むべしだ
又或る新聞に「——在來の同胞にしてモルモン信教並に清教徒の意氣と信念と希望とを有せば、迫害多き米國を去つて、メキシコに南米に、相團結して新日本を作れ——歴史は繰返す、アングロサクソンの天下果して何時迄續くべきか、正義の神必ず日本に味方する時が来る——」と妄言多罪(二元)

過去帳

た奥山住ひだ、花が咲かふか鳥が歌ふがそんな事は一寸もかまつておられない
明けても暮れても山と闘つて兎に角八年の月日は経過した、學校出た時分の大きな氣分も野心とどうやら、人生五十年の大半を歩みつくして、そこに何物をも得た物がないうやうだ、今年に妻といふ厄介なものが出來て國勢調査には一箇の完全な世帯として申告する事的光榮を有するに至つた、家庭生活に入つた今年を劃して、茫々乎とした去八年の夢の跡をたどつて見たくなつた
(二)
實際早いものだ、小倉の制服に、きたない帽子、破れた靴で處かまはず調歩した學校時代も全く昨日の夢の様だ、入學した頃は木曾も未だ鐵道も通はず南は中津川あたりから、北は塩尻あたりから笠に木葉が舞ひかゝる寂しい木曾路をテクラなければならなかつた、それが在學三年の移には新しい希望を乗せて走る演車は南から北に一貫して、なつかしい木曾には車窓から別れを告げるやうになつた
新しい希望を新調の洋服へそれは小倉の服でなく今まで着た事もないセルの合着があつたに包み、親兄弟親戚朋友に見送られて初めて赴任の途に就いた時分の心の中は今尙忘れやうとして忘られない、野も山も川も家も樹も空も皆一様に俺の前途を祝福するやうにさ、やさ合つて見えた、篠井驛から同行のK君と一處になつて任地に到着し

たのは翌々日の夕方であつた。
翌日は大林區署に出頭して辭命を受取つて見ると、K君は北に、己は南に、在勤中は兎に角五十里を隔てゐた、その日の午後二人は互に成功を祈りつゝ、同時に南北に別れを告げて各の任地に向つた、俺は昨日來た道を二時間半程後戻りして〇停車場に下車して、夕日に長い影をひきながら五里の道を車にゆられてK市へと急いだK市の一旅亭に旅装を解いた俺は、さすがに心細さを感じざるを得なかつた、十九の年の年まで父母の膝下を離れたのは旅行に出た時位のものであつた、新生活に入らんとして胸中幾多の希望に満つるとは云へ、遠く故郷の空をのぞむ時、知らずと旅情の寂さに涙ぐまふおられなかつた。

(三)

四月十一日 その日は俺れの一生を通じて忘るゝことの出来ない日本のだ、不生産的な學生時代から生産的な活動時代へ。自活の第一歩は實に此日を以て踏み入れられたのだ、輕舟にさほさして今や世の大海に向つて帆を切つたのである、風吹かば吹け雨降らば降れ、寄せ来る怒濤も何のその、見ん事に乗りまきつて成功の彼岸に達せずばなるまい、K小林區署の玄關前に立つた時俺の心の糸はいやが上にも緊張せざるを得なかつた
こうして門出にK小林區署長と小使等と聞

(四)

其夜署長の私宅を訪問し署長の家族にもお目に掛つた、山梨縣の人ださうで言葉もよく分るし、何處へ向つても言葉の通じないのに弱り切つて居た中なのだ、署長一家のみは何となら親しみを感ぜその後も度々訪問しては氣輕の奥さんから慰安の言葉を聞かされたり、鞭撻の辭を受けたりした、丁度其頃署長には俺と同年の男の子が有りてその年東京の高等工業學校に入學して父母の膝下を離れて居たが子供煩悩の奥様は初めて膝下を離れて遊學の途に就いた子供

(五)

の上を心配して居たらしく、己が行つてからは、まるで子供が歸つて來たといつていふ、世話をして呉れた、〇も亦親に離れ兄弟に離れて三百里の外に淋しい日を送るのでも有つたから、こうした署長一家の親切に對し感謝もし一層の努力も續けた、署長も亦「植村式に教育してやらう」といつてすべての仕事を手に取る様にして教へて呉れた敏捷に仕事をすることは管内の状況を一通り知つて置く必要があるといつて署長初め署員の出張にはきつと俺を隨行を命じた様だ俺も亦それが嬉しくて一生懸命に努力を續けた然しこうした幸福の生活も永くは續かなかつた、その年大袈裟な行政整理が有つて最古參者で有る植村氏も終に勇退する事になり、六月下旬新舊署長の送迎會が開かれたときは、何とも言はれない悲しい氣分が胸一つばいでした、それから三週間の後植村氏一家の出立を見送つたときは、慈父に別れたときの様に悲しみ且嘆いた。
然し己は決して不幸ではなかつた、植村氏に替つて執任した署長は誰であらう、木曾福島町出身の新進説氣のE林學士で有つた不相變愉快な日を續け努力を續けて居た、E林學士は未だ獨身であつたので、出張のときは何日も俺が留守居に署長の官舎に行つたのだ、夜だけ行つて留守番をして居るのだから己の事を「夜間署長」だといつてひやかしたものだ。

花場館中下ればその頃俺のたのむに家庭であつたのだ、俺の外に、A 技手やI 技手やB 技手などが下宿して居て、團樂の生活を送つて居た。退屈後は皆無處に檜木内川の邊りに散歩した。花場山の頂上に登つて、緑の若草の上に寝転んで語り合つたりして、愉快な日を續けてゐた。日曜日には自轉車で近傍を飛び廻つたり、植物採集に行つたり、外の山國有林に行つて仲々した杉造林地を歩き廻つたりして居た。その中にA 技手はO 小林區署に榮轉し、I 技手は家事上の都合で郷里のS 小林區署へと轉じ、俺れも斫伐事業に従事する事になつて初夏の頃院内の山の奥に引き込んだ。

太古のまゝだと思はれる杉林を日一日と研られて行く處を見ると、俺れは非常に愉快だつた、山の頂上に登つて、伐倒されて皮を剥けた杉丸太を見ると、いかにも強敵に打ち勝つた様な氣分が胸いっぱいになつて来た。朝から晩までよく歩き廻つた。疲れた身を事業處に運んで来て早速風呂の中に飛び込んだ時の心持は、何とも云はれない、氣持よく、食は驚く程進み、顔も手も日に焼けて真黒くなる。夜は死んだ氣がよくなる。ぬれる身、餘り丈夫でなかつた俺れも、徴兵検査の時に見ん事申種に合格し、入營の後には山東省の山野を跋涉する事の出来たのも、此の事業處生活の賜だ。

最初の伐採が處は、面積十七町歩、杉楮合せて二万餘石の材積を伐り出すのであつた。斫伐は外用學で一度は其講義を聞いてゐても、さしてさして實地にやつて見ると、さうな事はがらだ。樹木の伐倒は下倒距離の最短な方向を擇べど、その利用學の教科書にも書いてあり、又誰れでも云ふ事であるが、地形の千差万別の山嶽に行つて、最も、方向を決定するといふ事はなかなか、至難の業である。實地につけば、仕事の難易とか、爾後の動作の難易とか仕事の功程はどうかといふ事まで細かに考へなくてはならないので、あながち教科書のやうに最短距離の方法ばかりを固持する譯けには參らない、これは只の一例に過ぎないが、万事が此の通り「旦那さん」など云はれて、小さな自尊心に多少の誇り、を感じつ、も仕事の事については全く子供同様、澤山の出張旅費をもらつてゐて全く氣はずかしくすまない感じがした。

る事は出来ないので、皆汗と油を流した結果でなければ、うじても得られないのだ。今まで親の補助を受けてゐた時は五錢や十錢のお金は何かと思はなかつたけれども、自ら働いて得る見ると金の價値といふものが以前に倍して眼に映する。俺はその翌日次のやうな意味の手紙と共に自分で働いて得た金の中から若干を父母の許へと送つた。

母戀しと云ふやぶせなき情の切なるものがあつた。その中に翌年度斫伐所の材積調査があつたので、毎日輪尺や測高器をかついで山腹を上へ下へと馳せ廻つた、三百五十六號、杉、二尺五寸、輪尺を讀み上げる牙絶の間響いてゐた、こちらの谷では極印を打ち込みカンといふ音が澄み切つた秋の空に響くがと思ふと、あちらの谷からは樹を伐り倒す大きな音が静かな空氣を揺らして響いてくる。

兄の健闘を祈るや切なり、虫じきり函嶺の秋、永遠に結ぶ天幕内の契、再び云ふな忘れぞ君、東西相呼應して皇國に殉せん、右は同家族の人であつた高木吾より來信の一節である。僕はまだ熱が足りぬ。もつともつと喜劇に書かねばならぬ。

僕の耳底にある。一刻の餘裕の時間も我等には與へられない最高度の緊張を示さうといふのであるから長谷川假村長指揮の下に、毎朝の水浴場に至る三町程の道路修繕の命は下された。みんな長い旅に疲れて居る人々で遠くは朝鮮臺灣からも来て居るのである。大學生も立派な紳士も、また石工も居る。襦袢一枚で褲一つになつて、多くの人は只鐵も持たずに、腕一つでせつせと働いて居る。各組待前の區域が終れば、他に行つて手傳ふて居る。何だらう？ 此の奇觀！ 今の世の中にもこんな眞面目な人々がどうして居るのだらうと自分をあやしました。我々よりもつと年上の、立派な人が、謙遜な態度でこつこつやつて居られるのであるから。第一此の作業よりしても、僕なんかは不徹底の方の人間だつたのである。不徹底な人間が徹底的に報道しやうとするのは間違つた事であるが、事實はもつと(何といつたらまいか)不思議であつた事を承知して貰ひたい。

箱根みやげ (二)

仙石原の感激の涙、君な忘れぞ君、行邦國を愛ふ若人の血、

然も子一流の諸誰を交へて、滔々と我が國の經濟状態を語られて青年の奮起を促した點々たる二十の白い天幕が仙石原の夕陽に將に赤く染められんとする頃、團長は見送る二百の團員と共に、雄々しい大きい聲で、修養團萬歳と三唱せられた。その餘音は確決心と大なる奮闘となつて今尚

雄大で而も明媚な仙石原の高原は、道まで綺麗に修繕せられて見違へる程になつた。夕陽は芦ノ湖の方の西の空を茜色に染めて、明日の晴天を約束する。自分は何となく心の勇を感じ乍ら我が家に歸り、始めて旅装を解いた。見ず知らずの他人ばかりである

けれども、始めから和氣霽々として天幕内に満ちて居つた。みんなが自分の兄貴でもあるやうに思はれて、
食事が終われば各自が食器やすべてを洗ひに行く。金縁の先生も自分の茶碗を洗ねばならぬ。うかが面白い。平等だ。この川へ行つても満員で、「僕は何か縣だ」あなたの縣は中々盛ですね」と話あつて居る。

田澤内務書記官の講演

「早く集れ!!」と役場の邊で誰かが叫んで居る。編土の紐も結ぶ事出来ず、暗の中を講堂の方へ飛んで行く講堂つて! ろれば陸軍の馬糧舎なんだ。正面には養蠶と書いてある大きい提灯が、今夜こそは御神燈だといふやうな素振りですまじきつて居る。先着順に静眼目。や、あつて運沼主幹の合圖で一同徐に眼を開く。次いで偉大な體格の田澤評議員は壇上の人となつて、熱烈に我が國の現状を嘆かれ悲憤の演説をせられた。

我が國の建國の精神は決して偏狭な少々な理想ではない。廣々たる青天。天はこれ無限無窮の理想で。天孫瓊瓊杵尊が此の國に出御なされた事を、神代の民が天孫天臨といつて、又は「高天原よりお降になつた」といつて、尊稱したのも、事實は免もあれ、當時の民族が天を理想の神とし、瓊々杵尊は天より降られた理想の神だ、理想の神に仕へて此の國を永遠に理想の域に進ませやうといふ觀念に満ち満ちて居たからである。

我等の先祖はすでに大なる無窮の理想を理想として今日迄進んできたのである。如何に目的は美なりとも、手段と方法を充分考慮せざる思想は、まだ健全な思想とはいへない。所謂過激思想の生むた露國の現状は勞農政府で極端な専政政治を施して居るではないか。東京で流行したはやり歌が或年月を経れば、屹度田舎でも流行して居るやうに、今日の危険な思想が比較的質朴な地方人に迄及ぼすやうになつたら、我が國の將來は如何であらう。決して小なる障礙とは云へまい。自分は職務生何れの宗教何れの修養團體もよく知つて居るが、又職務上何れの團體にも關係したくないのである。然らば何故に此の修養團にだけ努力を惜しまないのであるか、「此の團體でなくして我が國の現状と將來とを救ふものはない自分は如何に他から非難を受けても、又如何なる犠牲を拂つても、これに盡力せぬばならぬ。これが自分の使命だ」と語られた先生は日晷は休むべき日ではない。奉仕すべき日だごきめられて、土曜日は旅行で立たれた次の日曜日は終日修養團の宣傳に各地を巡歴されて、又夜行で歸られるといふ風に努力されて居る。

が友に傳へやうと、我が家に歸つてから提灯の下でペンを取つたが、書き終ると十一時過であつた。(つゞく)
故山の友へ 多田駒藏
K君! 随分久しぶりだつたね。あのボカ〜と降り注ぐ日光が、禿げた裏山の土を赤く照して、若草の匂ふ中に寝轉んだ故山の春に君と別れてから早や半年になる。木會の夏は割合に涼しかった。然しまた別して遠來の客を喜ばせるやうな珍しい事もなかつた。唯平凡に、なたらがに過された過去の幻影を振り返る時、目の前には既に秋風が吹いて居た。
木會はもう秋だ、血の憐れた様な紅葉が點々として花の様に、また野火のやうに深川の邊を彩り初めた。底力のあるやうな秋風が恐ろしい音を立て、どこからか吹送つてくる。そしてどこかにボンヤリ佇んだ僕の体に強く吹當る時、氣抜けた僕の頭は急にハツとする——瞬間、動もするどフ〜とした魂までが吹渡はれるやうな氣がする。僕の心は堪らない淋しさに覆はれる僕はいつも考へて居る、人間の幸福! それは果して甚麼なのか?
僕が今日までの短かい半生は果して幸福だつたらうか? これから後の境遇は果して幸福であらうか?
幸福! それは聞いた丈けでも華やかな言

葉ではないか。そして世の中の凡ての人が幸福、幸福と言喋々程、それ程平凡で手易いものであらうか。

焼きつけるやうな炎天の下に眞黒になつて働く労働人や、百度に近い夏の日を、地獄の釜のやうな炭火の側で終日重い槌を振る鍛冶屋、蕎麥粉の如き白雪の降る中を、真赤な素足で走り廻る車夫や酒屋の小僧、彼らは何の爲に働くのか?。或は労働は人間の本務だと云ふ。働かなければ飯が喰へぬと云ふ。彼らは眞にじかく感ずればまたしも、僅か一日の糧の爲に、自己を忘れてまでも生活の犠牲に供せらるゝとは余りに惨め過ぎた話ではないか。また或者は趣味に活きる人間だと云ふ。藝術家だと云ふ宗教家だと云ふ。果して彼らはまたじかく活きつゝ、ある人間であらうか。

人生は暗いか? 明いか? ろれば知らない。然し確かに平旦ではない。暗い前途が急に明るくなり、明るい行方も俄に暗くなる。吾らとしては寧ろ余りに變化があり過ぎる。この大きい變化に出喰はした時、彼らはこれを突き退けて通る丈けの勇氣があれば充分である。か、然しそれは難しい確かに難しい。何故ならば押寄せてくる障害物は彼らの抵抗力よりもモット〜大きい場合が多いからである。彼らはその時始めてウンザリする。今迄の勇氣は幾倍して悲觀となり、失望となり。彼らは人を恨み世を呪ふ。譬へ無理に自分の心を勵まして

突進しても、ろれはもう昔のやうな華やかな心ではない。ろの何處かに潜んだ暗い淋しさは、も早や少しの事にも彼らをして倦怠と疲労とを感ぜしめる。彼らは長嘆息する、と同事に暗い冷い自分の境遇が一層惨めに感ぜられる。他人の境遇が譯もなく幸福に羨ましくなる。始め趣味に活るといつたのも、労働は人間の本務と云つたのも皆該であつた。唯世間体への言草であつた。そうた、確かにそうた。ろれは單に彼らだけではない。世間あらゆる人がみなろつた、面は恒に平静を装ふて居ても心はいつもソワ〜して居る、飢えた心の中は血眼になつてキョロ〜して居る。

所謂幸福は遂に稀有の獲物であつた。あ、幸福!。吾らは遂にこれを得る能はざるものであらうか? 幸福、即ち心の満足である。「幸福は心の貧しきにある、感謝は物の貧しきにある」と誰かが言つた、吾人は何故幸福を得られぬのか? ろれはろのものに既に不可能の事だからである、吾人は飽くまでも心の満足は得られない、乃ち幸福は心の貧しきにあるからである、若し吾らが心に満足を得たとすれば、それはもう生存の吾らではない、有史以來吾らは遂に心の満足を得た人を聞かぬ、哲學者も宗教家も、彼らは凡人より以上の煩悶不平を抱いて悶々の中にこの世を去つたではないか、釋迦や、キリストや、彼らは衆生万物を濟度せんとす大宿願の許に、あらゆる

苦難迫害を経て遂に、軻の中に逝世して居るではないか、而らば幸福は遂に無窮大のものでなければならぬ。

ろれ己の心に満足は得られない、然らば吾らは是非この貧しい心の中に活き乍ら得難い幸福を見出すなければならぬ、甚麼しし見出すか? ろれは各人の勝手である。あるものは露深き晨に夕に、花の如く天女の如く澄渡る天空に輝く星辰を理想として進む者もあらう、また暗い〜闇の中に覺束ない自分の幸福を見出すなければならぬ人もあらう、荒海の藻屑渦巻く千尋の底に嚴かに光る眞珠の玉を己の幸福とするものもあらう、吾らは眞に心から自分の境遇に感謝して——即ち心の貧しきに感謝して——活きなければならぬ、吾人は自分の信仰の如何に依て他人に嘲笑せらるゝを要しない、また他人を評するを要しない、人は各々理性が違ふ、唯自分の信する所に依つて進めばよい、辿るべき行路は違つても到着すべき「幸福」てふ文字に變りはないのである。基利督教に安心立命すべき教徒を捕へて、キリストの像を踏ませ、佛教を強勸せる家光の嚴命や蓋し酷の最たるものではあるまいか。
眞に貧しき心に感謝せる人!。それは果してこの世に幾何もあるだらうか? K君、僕も無論未だ満足し得ぬ二人である。呀、吾らは己に敢果なき人生の半を過したではないか! 僕は来るべき自分の生涯



通信

にこそ幸あれと祈るのである。

学校便り

大正九年度前期 始業式を行ふ
入學試験實施(本校受験者三十一名 中二名缺席)
四月三日 神武天皇祭に付休業
四月五日 本日より苗圃に出でて實習を行ふ
四月七日 高等師範剣道部生七名來福小學に於て稽古あり授業を休み教を受く
鹿兒島縣高等農林學校生徒來校
新入學生發表
四月九日 第三二學年級長副級長任命
四月十日 校友會各部長任命
四月十二日 級主任任命
四月十四日 入學式舉行
四月十五日 一學年假級長任命
四月二十三日 マラソン競争及觀櫻會舉行
四月二十八日 校友會役員任命
學校名を長野縣木曾山林學校と改稱せらる
五月一日 實習終了
五月三日 マラソン競争賞品授與

七月廿八日 本日出發第二學年生駒ヶ岳へ登山見學す引率指導教員菊地小貫の兩教諭
七月廿九日 修學旅行三方面共無事歸校
七月三十日 明治天皇祭
七月卅一日 本日より八月十九日まで實習慰勞休生徒各歸郷す
同 本校書記三溝管之氏國勢調査委員に任命せらる山林學校擔任
八月一日 教諭菊地一氏文部省主催實業學校教員夏期講習會へ出席のため上京
八月四日 岡部校長林業擔任者協議會出席旁々上京東京府下千駄ヶ谷自宅滞在
八月十日 教諭島内庸明氏第二回林業講習會並に林業教育擔任者協議會へ出席のため本日上海
八月十一日 教諭西澤靜人氏愛知農林學校並に岐阜農林學校林業教育視察のため出發す
八月廿日 本日より始業す
校長不在に付中村教頭代つて始業式を擧げ各種の配意をなす
田中教諭眼疾を患ひ松本市中澤眼科院醫院入院治療中なり
八月廿二日 東京千駄ヶ谷自邸内に治療中の岡部校長次女喜久子嬢病氣重患に陥られ遂に本日逝去の悲報に接す嬢は高等女學校在學中の由眞に哀悼に堪えず

本日より午前八時始業となる
五月四日 第一學年雜誌部委員任命
五月六日 郡役所階上に於て藤島紫雲の人生觀講(午後)
開校記念日に付授業休業
五月十五日 第二學年生(付添教員西澤田中)修學旅行出發東京日光方面
五月十七日 第三學年生(付添中村教諭小貫)教諭修學旅行出發京都、大阪方面
五月十九日 第一學年生(付添教員島内)教諭菊地教諭山下助教諭(修學旅行出發伊那諏訪松本方面)
五月二十一日 第一學年生修學旅行より歸校
五月二十二日 第二學年生修學旅行より歸校
五月二十六日 第三學年生修學旅行より歸校
六月四日 西筑摩郡教育會主催運動會を福島小學校庭に開會本校生徒出席
擊劍テニス其他の競技をなす
六月五日 同上
六月八日 校友會豫算總會を開き大正九年度豫算を決定す會費一人一ヶ月金四拾錢とす(前號記載)
六月十二日 土曜日午後より本年度第一回辯論會を舉行す
六月廿五日 地久節(授業平日の通り)
六月廿六日 本校前教授囑託教諭木曾支

寄宿舎たより

山村愛

中庭の花壇
從來寄宿舎の中庭は紙屑其他學用品等の廢物の捨場同様で一大塵埃溜の感があり従て舍外大掃除の際も努力と手数を要するに非常にて其の割合に清潔にもならず特に北窓に陣容を構へて居る者は窓から顔を出さず度に唾を催する程でありました、それで此の儘放置するのは衛生上は勿論土地の利用上からみても感心せないので之を花壇にいたしましたといふ動議が出て四月以來屢々額を集めて居りましたがそれは多大の勞力が伴ふので中々着手する機會がありませんでした。が舎監先生の御指導により五月になつて待ち焦れた修學旅行に立出るといふ間際に漸く事業を斷行する運びに到りました。周囲の赤松は全部根こぎとなし其他の樹木もなるべく伐採して日蔭となる部分を無くし、時に南窓便所の附近の樹木は舊のまゝに致して置きましたこれは多少なり共臭波(狀波)を送られるのを避ける爲であります。内都は土を掘り返して此處に幅四尺長二間の短棚形の床を作り之を各室で分擔して手入することに致しました。是迄の荒蕪地を俄造りの畠に仕立てたのですか

局長内藤善助氏逝去に付職員一同會葬す
本校助手山下不二三氏退職朝鮮京畿道漣川郡廳へ就任に付告别式を行ふ
六月廿七日 岡部校長縣立中學校長會議出席に付長野市へ出張
七月五日 岡部校長中等學校會議了へ歸校す
七月六日 職員會開會岡部校長より校長會議各事項に付職員へ指示す並に途次視察の小縣蠶業學校の一斑に付報告をなす
七月七日 新任木曾支局長佐々木和策、出被藤井上重則氏來任挨拶に來る
七月十五日 本日より學科授業終了
七月十六日 本日より夏期實習授業開始
七月廿三日 盛岡高等農林學校林學科生太田哲氏參觀
同 北海道帝國大學助教影山純介氏林學科生參拾名引率參觀
七月廿六日 本日にて夏期實習を終了す
七月廿七日 本日第一學年生修學旅行として御嶽登山の途に就く(岡部校長南澤塚越兩教諭引率)
同日第三學年生修學旅行として王瀧村駒ヶ根村林業見學の途に上る(中村島内兩教諭引率指導す)
同日愛知農林學校教諭佐藤吉氏林學科生引率參觀す

行つたところで元新開村の苗圃があつたらうです、一面の雜草で手の付け様もなく、

やさしい握拳を振り上げたわらびが澤山有り中ほどに丈の低い枝許り多い桐の木が五六本あるのみ試みに一鍬打ち下してみるとガ

チリと石轉許りでうんざり致しました何しろ數年間空地にして置いたのださうであり

ます、物質的のみならず精神的にも多少獲る處があるだらうと思ひまして兎に角諸君

に相談致しました處幸にも賛成を得ましたので早速着手致しました

面積は約一段歩——實際に耕作した所は之より少しです——これを八等分して一、二

三、四……十五、十六と各二室宛聯合して競争的に作ることに致しました

四月下旬の或る日の放課後各室とも室員總出にて地拵へに行きました入舎して間もない一年生諸君が眞剣で働いてくれたので忽ち立派な畠になりました「初めてですから馬齡諸が好いでせう」との塚越先生の御話

種子諸約十三貫を蒔きました。

五月下旬旅行から歸つて見廻りました時は

既に諸が雜草の蔭から貧弱な芽を出して居ました實習の後、日曜日の朝など肥桶を擔つて手入れに出掛ける特志家もありました

が元々荒地でありましたので稍ともする素情を現して雜草は益々暴威を逞しうするので弱りました、休暇が終つて歸舎して間もなく各室ともバケツや空俵を持つて收穫に行きました、雜草の間にイタ／＼しい諸の枯莖を發見したとき時期の後れたのを感じました。

一時は戦場の如き混亂を呈し忽ちに掘り盡し手に手に獲物を持つて意氣揚々と歸舎致しました收穫した馬齡諸の總計四十五貫ありました

再び鍬と肥を擔つて出掛けたのが九月六日の放課後でした跡地を耕作して菜を蒔きました害虫其他土地の關係上相當の收穫があるかどうかわかりませんが僕等は出來得る限り手入れを怠らぬ考へです

○食物の改良

僕等が入舎した當時から(以前のことは知りません)室長さんになるまで滿二ヶ年間

毎日朝夕の食事は麥飯に味噌汁と相場がきまつてをりました、それかわらぬか青菜の繁る頃から胃腸を害ふ者が續出し、粥の注文頻頻出來ることなら粥炊出し部を設け度い位従つて脚氣病者が多く休暇前になると歸郷療養する者が殆んど毎日の様に出來ました、これは或は食物の關係ではないかと

本年六月炊事委員藤田荒木の兩君大いに奔走せられ種々研究の結果食品(特に副食物)の大改革を斷行せられ茲後毎日炊事委員諸君も亦之に倣はれたので、本年に入り全然其の面目を一新し、爲に胃腸を害ふ者も殆んどなく、脚氣病者も僅に數名に減少致しました。

因に現在炊婦三名にて萬事滞なくやつて居ります(以下次號 大、九、六、一五稿)

大、九、六、一五稿)

大、九、六、一五稿)

大、九、六、一五稿)

大、九、六、一五稿)

大、九、六、一五稿)

大、九、六、一五稿)

大、九、六、一五稿)

大、九、六、一五稿)



大正九年九月廿三日印刷

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地 編輯兼發行人 安井正夫

長野縣松本市小柳町八十五番地 印刷人 淺川吉藏

【七】